

有間皇子の発狂

有明紀三年(天五七)九月条に、

「有間皇子、性黠くして陽狂すと、云云」

とある。

つまり、孝徳天皇の皇子である有間皇子が

気狂いした。しかし、実は「危難をさけ

る為なのであろう」黠くも、りつわり狂って

いた、という。

有間皇子は、皇位継承の有力候補とみられ

中大兄らから追害を受け、切羽詰って、狂

人をよそおったのかも知れない。

そんな事情を知らない有明天皇(有間皇子の

伯母)は、気が狂った甥の哀かな様子を見て

「牟婁温湯(和歌山県西牟婁郡白浜町湯崎

温泉)へ行つて静養して来るがよい」

とおすすめになった。

有間皇子は、牟婁温湯に帰つてくる

と、さも病氣療養してきたかのように見せて

ふひん云 不憫 厚云 歎く 1655 井上 245P ④4442

4.441P

④4383 10行 8才 ④4385 20行

いえる 小林 668 改行 宇治谷下 188P

国（紀伊国）の有様を讀め、
ただその場所を見ただけで、病氣は自然
に癒つています。云々
と申し上げた。齊明天皇は、水を開かれ喜ん
で、自らも行つてみたいと思われした。
建王の死
齊明四年（六五八）一月十三日
勢徳大臣が死去した。
そして、五月に、齊明天皇の皇孫の建王（中
大兄と遠智娘の子。啞であつた）が、八歳で
薨じた。
齊明天皇は、建王が口もきけず、幼くして
亡くなったので、ひとしお不憫に思われたの
であらう。たいそう悲しまれ、お歎きになり、
「自分の死後は、必ずわが陵に合葬するよ
うに」
と仰せられした。
十月十五日、齊明天皇は紀温湯へ幸され
た。建王をなくした悲しみを忘れるために行

④4443 1/24 行幸

少彦名 ④ 2595^P 1/3
折戸 鳴門の潮流は

4,442^P - 1/2

紀下333^P

④ 4420^P 2/3

宇治谷下190^P 特上可変がた
紀下322^P 井上下245^P
お歌(おけ)きり 前頁159

幸さいされたのであろうか。
■ かし、忘れわすようと務とめれば務とめるほど、
あんなにまでも可愛かわいかった。たあたあの心こころは、
建王たけののみこのことが頻しきりに思おもひ出だされて、
杳明天皇さいめいてんは、
いたみ嘆息たんそくされ、
歌うたいになった。
山やま越こえて海渡うみわたるとも
今城いまきの中うちは忘わすらゆまいい
建王たけののみこがいて面白おもしろかったあの今城いまきの中うちのことは忘わすれ
水門みなとの潮うしほのくだり海うみくくだり
後うしろも暗くらに置おきてか行ゆかむ
水門みなとの朝あさの激流げきりゅうの中なかを、船ふねで紀州きしゅうへとくだ
って行ゆくか、孫まごの建王たけののみこを暗くらい気持きもちで後うしろに残のこ
て行ゆくのがつらい
愛あいしき吾あが若わかき子こを置おきてか行ゆかむ
135SM かわいい私の幼おさないい子こを、後あとに残のこして行ゆく
のは悲かなしい
■ そーて、杳明天皇さいめいてんは、秦大蔵造萬里はだのおほくらのみやつしまうに詔みことりさ

重仁に相寄る新山月相 ④2785^p-3/2

くくく
白鳥

④2787^p ④2792^p } 5分
④2788^p ④2780^p } 併せられた前2頁18行

4,442^p-2/2

H29(2017)3,21.
H30(2018)10,31(4回) ~ 11,1(4回)
H31(2019)4,12(全) ~ 4,13(3回) 5月1日土令和元年(2019)
令和2(2020)5,29(全) ~ 5,30(4回)

5/29
5/29
5/29

*

れ、
「この歌を後の世に伝えて、世に忘れさせ
ないようにしたい」
と言われた。
第四十五章へ出雲大社の変
遷の項において既述

4.443^{P-1/2}

有間皇子の変

↑↑↑↑ 有明天皇が紀温湯へ行幸されてい

時、倭(大和国)で
有間皇子の変が起った。
史に著名な

その年(有明四年)十一月三日
天皇の行幸に際し、皇居に留り守る官で
ある蘇我赤兄臣(馬子の孫であろうとい
る)が、明瞭でない。娘を中大兄・大
海人(有間皇子)に納れ、天智十年に左大臣となつた

しかし、壬申乱後配流が、有間皇子に
語って、こう言つた。

「天皇の政治には、三つの失があります。
① 大きな倉庫を建てて、民財を積み集めて

② 長い渠水を掘って、公の食料を大量に費す

③ 舟に石を載んで運び、積んで丘にしている

ことか、その三つ、
であります」

いんめつえ
隠滅 170

まつさつ
持統 2083
西4425-1/2

り
裏 2308
裏 2308

いんめつえ
執物 994

4.443 P-2/2
(天智22)

察するところ
4473

うい
憂える 219

蘇我赤兄臣の国を憂える。蘇我赤兄臣は、多感な有間皇子の心を動かさず、おかなかつた。

では、蘇我赤兄臣が言っている「香明天皇の三つの失政」とは、一体、何をいうことを

指しているのだろうか。

察するところ、次のような意味なのであろう。

①この当時、もうすでに、

皇族や豪族などの家々、全国の寺院や神社、

さらに古墳の中からさえも、強引に民財を掻き集めて、大きな倉庫の中に積み上げていた

ように思われる。

こうして執物に集められた書籍・刀・鏡・

その他文字を記した民財は、その後、決して

元の持主へ返却されず、人民の財産（人民の財産）

倉庫の内に、ただただ長期にわたって保管さ

れ続けられていくことになるのであろう。

そして、国史（日本書紀）完成後、民財の

ことごとくが極秘裡に隠滅される運命にあつ

た、と推察される。（既述）

②「長い渠水」とは、香明紀二年是歳条に記

純真 1076^P

4.444^P - 2/2

機密 549^P

真髓 1154^P
中樞 1443^P

子 271^P

このころ、孝徳天皇の子である有間皇子は、
その真の意味を、いなかたようであるところを
ろをみると、理解して、
へ聖徳太子が心の内に描か小た理想の真髓
は、―――天皇を中心とする中樞部の極めて
少数の者達のみが知るべきであり、
密事項とされていたのであろう。
と推察される。

このころ、当時、有間皇子は十九歳であり、
成人に達して、いなかたので、―――そう、
たまたまの一切が、まだ知らされていなかった
わけではなかつた。知れなかつた。
尚、後文に、―――未だ成人にたらずとある。

純真で、正義感に燃える有間皇子は、蘇我の
赤兄臣のその言葉に、すっかり気を許して、
まった。
そして、

りめん 11枚 876
裏面 35

抹殺

200

40 E 23 4 25 8

4.445^P - $\frac{1}{2}$

生涯 1083

X # 上下 247^p
O 宇. 56 下 191
紀下 334^p 78

②4
中醫錄足紀本321^P 卷續自題5年

へ天皇（**斉明天皇**）の**政策**が**悪い**（トール）
のは、とりもなおさず、**背後**にいる**中大兄**と
中臣**鎌足**の**政治姿勢**が**悪い**（なかのおほえ）というこ
にほかならない。✓
と**思**った。
ここに**有間皇子**は、**蘇我赤兄**が自分**に好意**
を持っ**て**、**水**（くみ）を**知**り、**喜んで**（おうとう）
「わが生涯（ようがい）で始めて（はじ）兵（へい）を用（もち）いるべき（とき）時（とき）がきたのだ」
と言った。
なお、**斉明天皇**の**政治**に**関**（かん）する**蘇我赤兄**
の**非難**（ひなん）については、**従来**（いづうらい）からいろいろ
と**解釈**（かいし）されてお**り**、**事件**（いけん）の**その後の経過**（けいこ）から
みて、**有間皇子**（ありまのみこ）を**抹殺**（まっさつ）する**ための**
策（さく）**略**（りやく）と**解**（かい）し、**蘇**（そ）
我赤兄（がのあかえ）の**行動**（こうどう）の**裏面**（うら）には**中大兄**（なかのおほえ）の**指示**（し）が**あ**
たと**推察**（すいさ）する**説**（せつ）。
●**蘇我赤兄**（がのあかえ）が、**中大兄**（なかのおほえ）にとり入るため、**有**（あり）
間皇子（まのみこ）を**挑発**（てうはつ）したとする**説**（せつ）。

紀下335^レ末#上下248^レ 紀下335^レ25

4445^P 3/2

打ち明ける 192^レ
それは 次々 2行

天つき
改行

●蘇我赤兄が、途中で裏切ったとする説
などの諸説がある。(「日本書紀」(下) 日本古
典文学大系、岩波書店、三三四頁、注八参照)

米

それは、同日の十一月三日のふとだったの
だろうか。それとも、翌日の十一月四日の二

とであつたのだろうか。

有間皇子は、計略を打ち明け、こう言つた。

「先ず宮室を焼き、五百人で以て一日二

夜駈けて牟婁津(和歌山県田辺市の港、旧名

牟婁港)に迎え撃ち、一方すばやく軍船で淡

路国への航路を遮断し、牢のように閉じ込め

てしまえば、ことはたやすく成功するだろう。

の爲には、事が漏れないうちに、速やかに

なげればならない。皆の者よ、密かに兵を

集めて、急ぎ出陣しようぞ。」

(こ)

(こ)

たしい
内心
元 1640P

はあ
早まる 元 1821P

④ 4443 1/2 4.446P

#上下 2x8P ④ 4444P 未6P
紀下 336 1P (こ) 紀下 336 1P

紀下 335 5P ~ 紀下 335 5P ~ 次 2P 元は。

■ ところかその時、有間皇子を諫める者があ

って、
「そんな謀反を企ててはいけません」計るところ

はもつともですが、いかし人としての徳があ

りません。皇子はいま十九歳です。成人に達

してあられません。成人されてはじめて、人

としての徳を備えることができるのでござい

ます」

と言った。(香明紀四年十一月条の「或本に

云はく」参照)

・ ~~恐らく~~ その人は内心で

へ有間皇子は十九歳であり、成人してあら

れないので、御存知ないのです。天皇の政治

に三つの失があるように見えるとはいえ、そ

れには大きな理由があるので。どうか、早ま

って、事を起こさないで下さい

と言いたかったのだ。あうか

ーかし、逸り立つ有間皇子の心を、踏み

留まらせることは出来なかった。

■ 有間皇子は、「子供扱いされた」と思い受け入れなかったのかも知れない

とすれば、かえって、煽り立ててしまった結果になる。

いや、うがった見方をすれば、諫めるふりをして、にそそのかした

(こ)

齊明二年是歲

再建れると見え
少くとも
どうにか
紀下328

4,447^P-1/2

紀下334^P
中上下247

宇治6191^P「上」

④4419^P
④4463^P

改行
それは前3行

(悪い方へ誘い導いた) ようにも解される。(詳細不明)

月五日の出来事であつたという

蘇我赤兄の家へ行き、樓に登つて謀議し

てゐる時、脇息がひとりでに折れた。

へ不吉の前兆であらうか

ここに、盟約を結んで謀略を中止し、有間皇子は家に帰つて寝た。

はたしてその夜半、家のまわりにも、ただ

ならぬ気配があつた。

何ということだらうか

あの蘇我赤兄が、物部井連鮪を遣わし、

宮造る丁平城宮の地の湿原を埋め立てて

造つてゐる人夫達、および監督の

うを委すいさせ、有間皇子の市經(奈良

県生駒郡生駒町の一分という)の家を囲ませ

たのだつた。

なお、宮造る丁の宮とは、

へ齊明二年に遷都され、その年の内に火災

にあつたという

後、岡本宮のことであ

紀下328

地下330¹斤
4439⁷
#上(F) 243

岡本宮 火災

4.447^P-3/2

地下328^P注25

ろう

と考えられてゐる。(「日本書紀」(F)日本古

典文学大系、岩波書店、三三四頁、注一三参

照)

・なるほど、日本書紀の記述を見る限り、
その他ほかの宮を造つてゐた状況など考へにくそ
うである。

・いかし、

へ齊明二年に火災があつた日12.5.29のちの「後」岡本宮をかもとのみ

を再建する為ために、さういつた人み都を別の所へ

遷し、さういつた後再び12.5.29のちの「後」岡本宮へ

遷都した

と記されてゐるわけではない。(紀参照)

いのかい

・へ継続して都とされ続けてゐる日12.5.29のちの「後」岡

本宮をかもとのみを、二年後にもまだ補修してゐた

などという情況が有り得るのだらうか、と訝

しく思われる。

■そこで、この物語では、

へ日宮造る丁みやつくとは、奈良盆地北端の平城

宮の造成工事に従事してゐた人夫達、および

監督のことであろう

とを考えてみたい。

＊

早馬が、紀伊国の齊明天皇のもとへ遣わさ

れて、事の次第が奏上された。

有間皇子と、守君大石・坂合部連・堀屋

連・鮒魚は、捉われ人として、紀温湯の方へ護送さ

れていった。告人新田部米麻呂も引立てられ

て、連水てゆかれた。

十一月九日に、皇太子（中大兄）は、自ら

有間皇子に、

「どのようなわけで謀反したのか」

と尋ねた。

すると、有間皇子は、

「天と赤兄とが知っている。私は全く知ら

ない」

と答えた。

十一月十一日に、有間皇子は、藤白坂（和

歌山県海南市内海町藤白）南部町の白浜を南

和歌山県
すく南

地名
227^P

地名
71

地名
71

13
記す 1135

4.449^P

紀下399^P 下 紀下361^P 注30 661
紀下335 新刊 -658
3216 紀下579 3

こうがけ 2745^P
上野 研田
紀下334^P 注15

望する坂^{さか}。その他多数の説がある。において

紋首^{おの}された。塩屋連鮒魚と、舎人新田部連米

麻呂^{まろ}とか、藤白坂で斬られた。舎人新田部連米

・なお、守君大石は、このとき上毛野国（群

馬^{うま}）へ流されたといえ、三年後の天智

即位前紀^き齊明七年（六六一）八月条に曰百濟救援

の將軍^{しやうぐん}曰、また天智紀^{てんぢき}称制四年（六四五）是

歳条に曰遣唐大使^{けんとうたいし}になつたこと加記されて

いる。

また、坂合部連^{さかひべのむらじくすり}葉^はは、尾張国^{おわりのかた}へ流されたが

壬申^{じんしん}乱の際^{さい}には近江側^{あふみかた}の將^{しやう}となり、六

十七年七月丙申^{ひるしん}に戦死する。

定かでないが、

へ有間皇子^{ありまのみこ}は、うまく陥れられた。

ように感じられる。

ともあれ、こうして、中大兄^{なかつのおほえ}の即位^{すけい}をはば

む可能性^{かのうせい}がある者は、ついにいなくなつた。

*

同文 4455-1/3 29~
H5.7.25(日) 紀下338 22 百濟新羅が交戦中だといふ
大代朝鮮 202, 263 改頁87
4,450P

紀下338
それ 船 1280

563.8.16(土) 日
夏休みの最後

白村江の前と
は、八ておきにい

大陸の動向

● 齊明五年(六五九) 正月三日に、齊明天皇
は紀の温湯からお歸りになった。
* 正月一日を、このように過さされたのかは、分からない。

● 同年七月三日、遣唐使が遣わされた。
難波の三津浦から西へ向かった二艘の船は、

● 国の口、大津の浦(那津ともいう)から発した。
約一ヶ月後の八月十一日に、筑紫
の口から約一ヶ月後の九月十三日

● に、百濟の南の畔の島についた。
翌十四日、朝鮮半島の西岸に泊って北上
せず、黄海南域を横切ろうとして、二船相伴
い大海に出た。

● なお、これまでのように朝鮮半島西岸を北
上する航路を取らなかったのは、百濟・新羅
が交戦中だったからである、という。(「日

本書紀」(下)日本古典文学大系、岩波書店、三
九頁注ニ参照)

● また、参考までに述べると、唐の高句麗への
出兵が、六五五年(齊明元年)、および六五八

唐時代の航路(南路)
778ある。唐時代の航路 主15, 16
紀下338

4,451P

たどって 1387 兎も角 1619
「ともあれ」 4449 紀下339 1222
何にせよ じにかく

年(香明四年)に引き続いて、―――是の
年(六五九年、香明五年)にも繰り返されたの
だった。〔古代朝鮮〕井上秀雄、日本放送
出版協会、二〇二頁、二六三頁。〔日本書紀
(F)日本古典文学大系、岩波書店、五七七頁、
補注二六一四参照〕
兎も角、このような戦いを避ける為、
へ向かう二艘の船は、百濟の南の畔の島から黄
海を横断しようとしたのであろう。
あるいは、山東半島あたりにたどり着こう
としたのかも知れない。(未詳)ネカワとも訓める
ところか、その翌日、九月十五日の日入の
時(中国では午後六時頃)に、二艘のうちの
一艘が横からの強風にどんどん流されていつて
やがて南の海の、爾加委(という島に漂着した
他方の船も烈風に流され、早
くも十六日の夜半の時、会稽県の須岸山(舟
山列島の須岸島かという)に到達した。東北の
風が吹き、いかも大変強かった。
二十二日、余姚県(杭州湾南岸の浙江省余
姚)に着いた。

杭州湾沖

4.452^{P=5} 25 紀下339注34 紀下339注27
2000 小林中国年号索引 通つてない

紀下339注34 潤 紀下338末2行 井上(下)2575行
紀下339注27

潤十月十五日 津守連吉祥は、馭馬に乗
つて首都である西の京(長安)へ入ったか
長安の都に天子(第三代の高宗)はおら小な
かつた。ほ人の十日前(閏十月五日)に、東
都洛陽へ出発さ小たからであつた。
唐の首都は長安であつたが、他に陪京とし
て洛陽を、東都と、太原を、北都と定め
て、資治通鑑、唐紀によると、
「高宗は、顕慶四年(六五九)閏十月五日
に長安を出発、同二十五日に東都洛陽へ到着

さ小た

という。(「日本書紀」(下)日本古典文学大系

岩波書店、三三九頁、注二七、三四参照)

*

えっけん 239^p
29
15
14日

563.8.18(木)

#L F257^p

32F 339^p 19^p 10^p 11^p

→ ⑤

4,453^p

32F 340^p
改訂

326^p
④ 4018^p

前頁 1 行

津守連吉祥は、馬を走らせ、十月二

十九日に東京（洛陽）へ到った。天子は、

う、~~て~~東京に着いておいでだった。

三十日に、天子は謁見して、こうお尋ねに

なつた。

「日本國の天皇、平安にますや不や」

使人は、謹んで、こうお答えした。

「天地徳を合せて、自づからに平安なるこ

と得たり」

天（大倭國）と地（倭國）とが一つに合

わさつて、自ずからに平安になりました

という意味であつたらうか。

十一月一日、東都洛陽の朝廷で、冬至の

会ひがあり、その日にまた天子にお目いあり

した。入朝した諸蕃のなかで、倭（日本國の

意か）の客人が最も勝水していた。

この時、大唐の要請によつて、多く

の國々が入朝していたのであろう。

かつて、隋の大業六年（六〇〇）正月、隋

煬帝が朝貢の諸國使臣を招いて大饗宴をやつ

たように、唐の高宗は、この目出たい朔

日冬至の日、中国では古くから、十一月一日

おとし
陥れ
る
311P

紀下577P注4

義慈王 聖武天皇(2)
(641~660) 396P

4,454P

井上253P 12月1日
紀577P注4
宇治下 4455Pに同文

紀下340P注7

かたまたまた冬至にあたると、瑞祥として祝う
風習があった。に、朝貢の諸国使臣を招いて
大いに祝ったのかも知れない。
一かゝそんな時、火事騒ぎがあつて、使人達
は見捨てられ、その後には相手に立てなかつた。
こうしたことがあつたのち、十二月はじめ
に、勅があり、
わが国(唐)は、来年きつと海東へ朝鮮
半島の征討を行なうであらう。それゆえ、
おまえたち倭の客人は、東へ歸つてはなら
ぬ。
といわれ、結局西京(長安)に幽閉され、戸
が閉ざされ、往來を許さず、苦しみながら
いく年かを過ごすことになる。(紀)
*
この当時の朝鮮半島の歴史のあらま
しについで、見ておくことにしよう。
百済の義慈王は、六四一年の即位以後、高
句麗と結んで、新羅を攻めた。
六五四年(孝徳白雉五年)ころ、百済・高句
麗の連合軍が新羅の北境三十余城を陥れたた

71

4454^p
天守
改行

版
4454^p
6行
改行

4.455^p-1/4
ニと

ほニき
鋒先を転ずる
2033^p
改行

4450^p末-4451^p
にキ同文

め、新羅は唐に救いを求めた。
唐の高句麗への出兵は、六五五（斉明元）
年二月に始まり、六五八（斉明四）年、六五
九（斉明五）年と繰り返された。（既述）
わしい戦果はあがらなかった。
唐は、百濟の方へ鋒先を転じた。
唐が百濟征討を計画したのは、百濟と高句
麗との結び付きを切り離し、
行きづまった高句麗征伐を有利有効に
展開しようとしてのことであつたろうか。
唐の日百濟征討の計画は、六五九（斉明五）
年の冬には、すでに立てられていた。
一月二十一日に、邢国公蘇定方を神丘道総管に
任命している（旧唐書、高宗本紀）のは、それ
を証している。また、先に述べた。また、十
二月のはじめ、我が国の遣唐使が受けとった
高宗の勅旨に、
「国家、来らむ年に必ず海東の政有らむ
とあつたのは、さらに直接的にそれを立証して
いる。」

4459^P-1/3 5~6^頁

4,455^P-2/4

新ヤ(1)-395^P末

三國史記(2)末の泗北城図

地図とくちよく

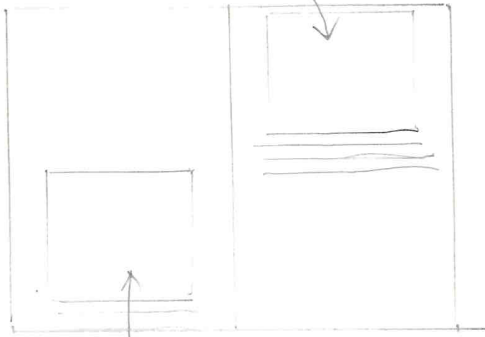
六六〇(齊明六)年三月、唐の蘇定方は十
三万の兵をもつて萊州(山東省)から黃海を
渡り、百濟に向かった。
同月五月、新羅の武烈王は自ら軍を率いて
出でて唐の蘇定方の軍を迎えた。
唐軍は、徳物島(仁川の西南海上にある徳
積島)を終て、伎伐浦(忠州南道群山付近)
から白江(錦江)を溯っていった。
七月十二日、唐・新羅の両軍は、百濟の都
城を包囲した。(扶余の泗北城)
七月十三日夜、百濟の義慈王は、太子隆以
下左右(側近)とともに脱出して、東北方の熊津城
(忠清南道公州)に入った。(第483図)公州の熊津城
にかし、七月十八日、義慈王が降服して、
ここに一応、百濟は滅んだ。(「日本書紀」
(下)日本書紀文学大系、岩波書店、五七七頁、
補注二六一四参照)

*

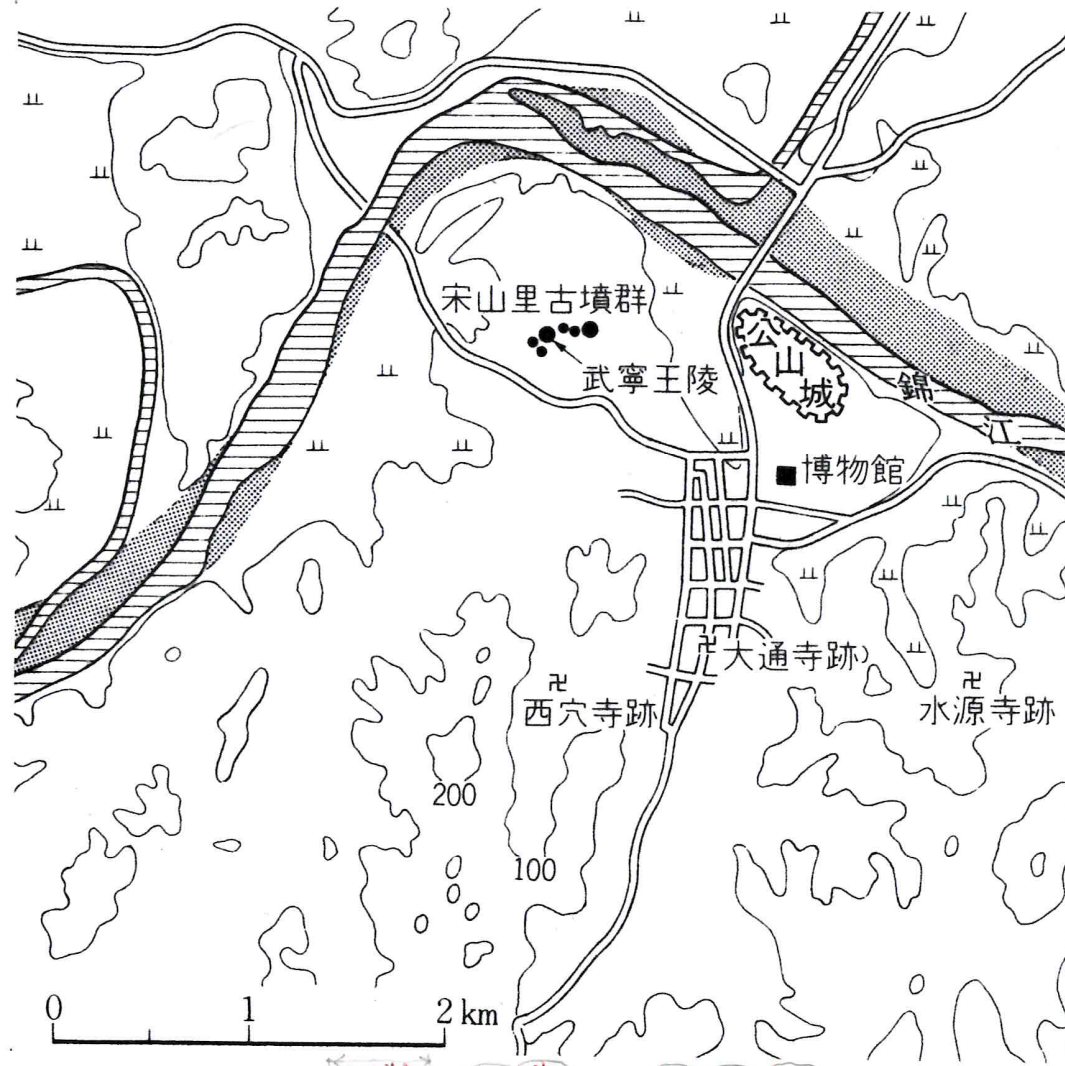
前頁
13行

4455^P-3/4

・右頁の上半分に、はみ出して大きく掲載下さい。



次頁
(泗沘城)



第483図 白着公州の『熊津城』
くだらゝコンジュ 半字PK

『韓国考古学概説』金元龍^{キムウォンヨン} 六興出版 1984年4月25日発行 194頁参照

公州の『熊津城』は、扶余^{フヨ}『泗沘城』^{コンジュ}の東北約30kmに位置している。武寧王陵^{いぢ}がある。

- ・図の裏面の文字が消え去せん。
余白部分を白くしておいて
下さい。



④ 4455-2/4
20年 中興
三四月比+減

フヨです
新ヤ(1)-396^P本⁴ 2行7ヨ

第484図 ^{くだらこうぎ}百濟後期 ^{みやこ}の都 ^{しほほう}「泗北城」 ^{ふゆ}（現在の扶余）

『三國史記』(2) 井上秀雄訳注、平社、1987年1月20日2刷発行、422頁参照

・百濟は、538年(聖明王16)~660年(義慈王20)の百濟滅亡まで、泗沘城を都としていた。(「東洋史辞典」創元新社、昭和44年5月(六版)発行<泗沘>参照) 343

三國史記(1) 181, 199頁注26
 紀下358^p 577^p 紀下578^p 4456^p - 1/2

紀下578^p 注9 未687
 余勢 敵の勢

同年(六六〇)八月に、
 余勢の抗戦が開始した。
 (残りの勢力)
 その後、経過は、改略次の通りで
 ある。
 六六一(斉明七)年六月、新羅の武烈王は
 病死し、太子の金法敏が立って文武王となつ
 た。
 その頃、唐が高句麗征討を再開し、新羅の
 文武王も北征した。
 一か、翌六六二(天智元)年の春、高句
 麗征討をあきらめた唐は兵を引きあげ、新羅
 の主力もまた帰国した。
 六六三(天智二)年七月、文武王が率いる
 新羅兵は、熊津城の唐兵と合流して西下、八
 月十三日、百濟・日本兵の本拠であつた周留
 城を攻撃した。
 (未詳)
 六六四、白村江の戦いとなり、九月八
 日、周留城は陥落した。
 百濟復興の望みは、潰え去
 った。

→ H5.7.26(月)⑧
+9.3.5(火)

4.456^r- $\frac{3}{2}$

る(こ)になる。(「日本書紀」(下)日本古史文
学大系、岩波書店、五七八頁、補注二六一九
参照)

*

346

(注) 天体観測の場であらば
屋根は無い筈!

4,458^P 紀下416^P

⑤1479^P 新南如按主7m 3/4ほど
R=22.5cm

⑥5031^{P-1/4}
489へ

良泉高市郡明日香村飛鳥で、いつ造られた

のか定かでないか。漏剋や太鼓を置いたと

みられる楼閣の遺構が発見された。

この建物遺構は、玉石で築いた幅一・八

メートルの溝に囲まれ、やはり玉石で四面を築いた

高さ約一メートル、一辺二十二・五メートル(この当時の

一〇〇尺か)の正方形の基壇の上に見出し出た

れた。嚴重な礎石の固定方法が採用されてい

るところから、単に漏剋を置いただけでなく

日本書紀の天武四年(六七五)一月五日条に

記述されているような天体観測施設・占星台の

ような建造物があったのではないかと推

測されている。

という。(「朝日新聞」昭和五十六年十二月

十八日。同十二月二十二日付参照)

奈良県の飛鳥で見出し出されたこの施設が、

日本書紀の記述とどのように結びつくかにつ

いては、追って考えてみることにしよう。

(第八十七章「占星台」の項において述べた

い)

米

④449^P128 紀下228^P449 宇治下 紀下345^P36 ④4456^P1/2 武王 ④4455^P3/4 1499
 ほぼ同時の要請 宇治下 紀下346^P 4.459^P1/3 ④4456^P1/2 武王 ④4455^P3/4 1499
 いと同時になる

百済救援

前述のとおり
 先に述べたように

六六〇（斉明六）年七月十八日に、
 王が降服して、百済は滅亡した
 という。

戦が開始された
 同年（六六〇）八月
 百済の余勢の抗

のだった。
 十月、百済の復興を願う鬼室福信（武王）

（義慈王の父）の従子は、日本に使を遣わし、唐の捕虜百余人をたてまつり、救援の派遣を要請して、こう申し出た。

王子余豊璋（舒明三年三月一日に人質として来朝し、日本に留まっていた百済の王族を迎えて国王にしたいと思ひます）

と申し出た。
 ニニに、斉明天皇は詔し

紀T347P157

さなく
沙喙 紀下 347P 28
622

4459P-23

よる 2292 宇治谷下200P
依る 2292 #上259P 65

改行

改行

改行

救援の軍を乞う。は、昔から聞くと、
 であり、危うきを助け、絶えたものを継いだ。
 ことか、古来典籍に明記されています。今、百
 済国が窮して我を頼って来た。本の国が亡
 んでしまった、依る所も告げる所も無い。
 である。戈を枕にし、軍隊と国家を心に掛けて安
 眠。ないたとえ。嘗膽（胆を嘗めること）で
 越王勾践の故事で有名。一、あります。どう
 か、救援。一、ほ。い。四
 と、遠くからやってきて願ひ出ている。その
 志を、どうして見捨てることか出来まい。う
 將軍等にそれ小命令をくだし、百の道か
 らとも前進させなさい。雲のように集い、
 雷のように動いて、みな沙喙（新羅の六部の一つ）に
 集結し、敵を倒して、百済の窮迫をやわらげ
 なさい。役人たちは、王子のために十分な用
 意をし、礼を以って送り遣わすように。
 と、云々言われた。
 恐らく、齊明天皇の心の内には、

改行

改行

へ神功皇后の新羅征討
の時の有様が、鮮やかに思い描かれていたに
違いない。

そしてもしかしたら、香明天皇は、
へ自ら新羅討伐におもむこう
と決意されたのかも知れない。

十二月二十四日、香明天皇は、難波宮に出
でまさ水たや

推察するところ、香明天皇は、
へ福信の要請に随ひ、
口筑紫へ行幸し

救援軍を（百の道から）ともに横隊を組んで前
進させ、新羅の沙喙へ遣わさう

とお考えになり、まず斯に難波へおいでにな
って、諸の軍用器材の準備をされたのであ
ろう

と思われる。
香明紀六年（元元）十二月二十四日条に

こう記されている。

天皇、難波宮に幸す。天皇、方に福信が
乞す意に随ひて、筑紫に幸して、救援軍を遣う

むと思ひて、初づ斯に幸して、諸の軍器を備

とふ
とある。

(*)

大伯皇女・大津皇子の誕生

齊明七年(六六一)正月旦の行事は、難波宮でとり行なわれたのだらうか

齊明七年(六六一)正月六日、齊明天皇をお

乗せした御船は、西へ向かう航路についた。

八日、船は大伯の海(岡山県邑久郡の海)

に到った。その時、大海人皇子の妃である大

田姫皇女(中大兄の娘)が女の子を産んだ。そ

こで是の女は、大津皇子と名づけ

られた。

そして、予め述べると、

大田姫皇女が、翌々年(六六三)に

大津で生む男の子は、大津皇子と名づけられる

ことになる。

なお、宣化紀元年五月条に

これは博多大津の古名であるという。

本書紀(下)日本古典文学大系、岩波書店、五

九頁注二三参照

なお、齊明紀七年三月条に

博多港のことであるという。

日本書

H30(2018)11.1(木)~11.2(4回)

IF H29.3.18(土)~21
H30.7.27(木)④

4,461^P

とあれ
次89

OK

紀(下) 日本古典文学大系、岩波書店、三四八

頁注十一参照

とあれ 日 郷大津口は、博多湾に面した

所の地名だったと解されるや

*

熟田津の石湯行宮
 いはゆのかりみや

同齊明七年（六六一）正月十四日

御船

は伊豫の熟田澤の石湯行宮に着いた。(紀。下巻一八)

石湯行宴は、從來愛媛集松山市の道後温泉

のことと考へらゝてきたが、近年松山市栗佐

町の遺跡のこととする見方が出てきた。→後

述

す
た
わ
ち
ん

へ 天明七年正月六日に 難波から西へ向かい

八日後の正月十四日には、もう愛媛県に熟田

津つの石湯いはゆ行宮のかりみやに着ついた✓

と
い
う
。

有明紀
七年正月六日条、
及ひ万卷一十八に

御船西征

と記さ
水て
いる
その
言葉に
母と
とに
相成
い

速やかな出陣であった。

尚、伊豫国風土記逸文の湯泉条の末尾に、

後岡本天皇（有明天皇）・近江大津宮御

天智天皇・淨御原宮御宇天皇（天

武天皇)の三軀を以ちて、一度と爲す

とあり、この行幸の時のことを述べたものと見られる。
 (未59) いつたかめ

続文 4477-1/2

疾駆

4.462-2/2

夫君 妻が夫とよぶ敬称

破天荒 1804

ここに、かなり破天荒なところながら、次のように考えてみたい。

■ 齊明天皇が、難波から西征の途につかぬ直前の頃のことであつたらうか。

へ日 新羅征討という国家にとつての一大事を、一人で軽々しく決断してよいものではない。

とお考へになつた齊明天皇は、大倭国（肥後国）に於いて国史編纂作業をすすめておいて、なる夫君（舒明上皇）に、新羅討伐の是非をお伺いする為、使者をお遣わしになつたのであろう、と推察される。

■ 齊明天皇の書状を携えた使者の乗る早馬は、疾駆し、たちまち大倭国（肥後国）へ到つたに違ひない。

■ かし、太上天皇（舒明上皇）の返書が、伊豫の熟田津の石湯行宮で待ちわびておられる齊明天皇のもとへもたらされる迄には、かなりの日数を要した、と思われ。

＊

情景 4471 4.463^P - 1/3

712494^P 14行
712495^P

万 ①-13^P

万 ①-17^P

712495^P 38

712495^P 172^P 173-68^P

齊明天皇の御心の内は、こみ上げてくるな

つかいさで一杯だった。

熟田津の石湯行宮の大殿戸（天皇の御殿の戸）

のあたり一た棕と松の木があって、樹の枝が

湯泉の上を覆うように伸びていた。（伊豫国

風土記）又へ湯泉へ条。万巻一八。万巻三

一三二二。万巻一六の左注参照）

この枝々に、鴈と此米鳥とが集まって、

戯れ時っていたのですよ。（風土記）

齊明天皇は、

へかつて、舒明天皇が、それらの鳥達の為

に、稲穂等を繋けておやりになった。

様子などを、まるで昨日のことのように思い

起こしになつていた。（写真図版 708 へ鴈へ写

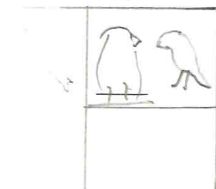
真図版 709 へ此米鳥へ参照）

*

死
いふ
こと

・カラー

・右頁の上半分に
掲載下さい。



4463^P 2/3

* 文字を全て削除して下さい。



Japanese Grosbeak

桑原
L2:

文字を
削除

1464
写真図版 708 鶺鴒 (鶺鴒ともいう)

1369
「日本の野鳥」山と溪谷社、1992年4月1日、15刷発行、

535頁、他参照。

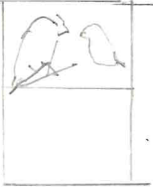
・黄色い大きなくちばしが目立つ。灰色の鳥。

・大きさは、ムクドリくらい。

4463 P- 3/3

* 文字を全て削除して下さい。

・カラー
・左頁の
上半分に
掲載
下さい。



・出来るだけ
明るく
下さい。



Howfinch

~~いめ~~
旨鳥, 蠟嘴,

L19cm W

文字を
削除

1409 「いめどり」
写真図版 709 此米鳥 (旨鳥ともいう)
1309 「日本の野鳥」山と溪谷社 1992年4月1日 15刷発行

533頁 他参照

1209 太いくちばしで木の奥を割る。茶色っぽい鳥。
小形でヒバリくらい。(雀より、やや大きい)

大蛇 鰐 535

358

小林 320

④4251 4行 ④4250 未行 ④4457 P ④4482 P 4,465 P ④4463 P 1/3 12行 改行 大宅 龍 大宅 龍 ④4463 P 1/3

とすれば、四国の石湯行宮とありて、
 へ舒明天皇が、標と松の木に集まつた
 てゐる鵲と此米鳥たちの為、枝に稲穂をお繋
 けておあげになつた
 のは、夏でも冬でもなすうであるや
 だ、それでは、早れは、春・秋のうちのどちら
 だ、たのだらうか、たぶん
 へ集まつてゐるこれらの鳥達の為、稲穂
 等を繋けられた
 というのだから、現在の太陽暦における
 秋のことだ、たのであう、と推察さる。
 すなわち、秋となり、北の方から群を
 きて、渡つてきたばかりの鵲と此米鳥達の為
 へ、舒明天皇は稲穂を掛けておあげになつた
 のであう、と思われる。
 へ、行幸の項において、
 舒明天皇は、大倭国（肥後国）の都と、
 大和国の都との間を幾度も往来され、
 その往路または帰路に伊豫の湯の宮に行幸さ
 れたのかも知れない。少くとも舒明元年・九

（六三九年）

115.7.29(株)⑤

66/19P
629
32

④4227

⑤4227

4,466

1人えん
深遠 1141
客 30P

百科 31-412

12月は冬である
12月には冬である

④4250P-1/3 12月には冬である
今年とやいふ

(六三七年)

(六三九年)

年・十一年の三回は、伊豫の湯の宮にお立ち
寄りになったのであろう

と述べた。

①舒明元年八万巻一八

②舒明九年十二月十四日八万巻一八

③舒明十一年十二月十四日紀

の三回であるが、②と③は現在の太陽暦によれば

冬である。

だから、これら三回のうち秋の行幸の可

能性があるのは、ただ一度、舒明元年(六二

九)のみであるといえよう。

聖徳太子の深遠な御意向に沿う為、

舒明元年の秋に、舒明天皇と皇后(後の

皇極・香明天皇)とは、大倭国(肥後国)を

後にいて、伊豫の熟田津に行幸され、それから

大倭国(大和国)へと向かわれたように観察され

る(第一表第七十九章大倭国から大和国への

遷都の項参照)

香明天皇は仰せられた

「あの時は、本当に楽しかったわ。あれか

らもう、三十二年も経ったのね」

4,467^P

伊豫の湯の宮のたすまいは昔のままであ
ったし、あたたかな温泉のぬくもりも同
じだ。み湯の上に枝を伸した臣の木(樅の木)
の枝ぶりも変わって、いなしい、今明天
皇が稻穂を繫けておやりになつた枝さ
え、
全く其の儘であるように思えた。
宝や、ほら見てごらん。小鳥達が喜ん
で、
なつかしい声が聞えた。鳥達の戯れ声
も聞える。
驚いて、声のした方を振り仰いだか、
しかし、そこに愛する人の姿はなかつた。
こんなにと沸き出す湯が溢れ、流水で湯け
むりがあたりを覆つていた。
■ 齊明天皇は、昔日のままだに残つて
る物などを御覧になり、感愛の情を起こされ
たという。
● 万巻一ハに、
田津の石湯の行宮に泊つ。天皇、昔日より猶
ほ、存れる物を御覧し、當時忽感愛の情を起
す。云々

→ HS. 7.30分⑤
H9.3.7

4.468P

④4472°17分

胸

H29(2017)3.82
563.8.21(+)⑤
→

いんてん ぼんとう
隠遁 169 没頭 2043

とある。
いま一度、是非にもお会い致しとうござ
います。
・舒明天皇との、過ぎ一日の遊興の際の数々
の思ひ出が、せつなくも鮮明に、齊明天皇の
心の内によみがえったのであろう。

*